

考えよう！  
取り組もう！  
SDGs

SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT GOALS

# 教育現場で取り組むSDGs

—学校×企業×行政で実現する未来教育デザイン—

山藤 旅間 Santo Ryobun

新渡戸文化小中学校・高等学校教諭 学校デザイナー (一社)Think the Earth SDGs for Schoolアドバイザー

## 何のために学ぶのか？

近年、日本でも巨大台風等による災害を目の当たりにし、気候変動を肌身で感じる時代となりました。サステナビリティ等の研究で世界的にも著名なヨハン・ロックストローム氏も、2019年10月の朝日地球会議において「巨大台風の発生は、地球温暖化と深い関係があり、人間生活の影響が後押ししていることは否定できない」とコメントしています。

また、2015年12月にパリで開催されたCOP21では、気候変動枠組「パリ協定」が採択され、1.5℃抑制と21世紀後半に温室効果ガスの排出量を実質ゼロにする脱炭素化の目標が掲げられました。さらに同年9月、地球規模の持続可能性達成に向けて持続可能な開発目標(SDGs)を含む、持続可能な開発のための2030アジェンダが策定され、日本でも最近、ロゴバッジを身につけ、業種を超えてSDGsに対する賛同を表現する人によく出会うようになりました。確実に世界の「物差し」は変化しています。

一方で、学校で教わる内容は、変化しているのでしょうか。1.5℃抑制に向けては、近々の10年間の行動が重要とも言われ、迅速で具体的な解決策を求められる時代ですが、社会課題を当事者として自覚し、その解決に向けて自ら学びを深め行動するための学びの機会を学校は作り出しているのでしょうか。

## 新渡戸文化学園での挑戦

新渡戸文化学園は、90年の歴史を持つ東京

都中野区にある、1学級30人、1学年2クラスという小さな幼小中高短大一貫校です。時流を読み解き、自律型学習者(Happiness Creator)の育成と、実社会とのつながりを強化する教育を軸としています。そして、国際社会に存在する課題を見出し、自分も他人も、そして人間以外の地球生命体すべての命を幸せにする視点を養い、主体的に、そして協働的な学びを進める自律した学生を育む学校をめざしています。これらを達成するためにSDGsを活用することは、学生の意識変化や学ぶ目的の確認に関して良い方向に作用しています。

課題を見出し、解決に向けて学ぶためには、すべての教科の基礎学力を高める必然性が出てきます。そのため、本校では「総合的探求の時間」をカリキュラムの中心に置き、各教科の学習がその学びを深めるための手段となることをめざすという教科横断的なカリキュラムを実践しています。また、社会課題を肌身で感じ、学ぶ目的を見出す原体験となるようなスタディツアーも企画・実施し、選択制としています。

## 東京都檜原村プロジェクト

持続可能な社会を担う次世代の学生およびその保護者の2世代と自然とを「つなぐ」ため、6次産業化\*<sup>1</sup>を視野に入れた次世代型の里山のあり方を考えるプロジェクトとして、毎月1回、東京都<sup>ひのほらむら</sup>檜原村における活動を開始して3年になります。SDGsの目標では、持続可能な生産消費、水陸生態系および森林管理の持続性などが挙げられていますが、都心で生活する人々の日

\*1 農林漁業(1次産業)、製造業(2次産業)、小売業等(3次産業)の事業との総合的で一体的な推進を図り、地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取り組みのこと。

常からは遠い存在であるため、まず消費者と自然をつなぐことを重視しています。そのため、持続可能な社会に向けて、値段と大量消費の便利さではなく、エシカルな物差しによる次世代の消費意識の変容をめざし、「楽しさ・おいしさ・心地よさ」と「持続可能な里山利用とこれからの新しい利用方法の考察」を掛け算させたプログラムをデザインしました。

具体的には、3つのプロジェクトが動いています。1つ目は、耕作放棄地の開墾、オーガニックコットンの栽培、糸紡ぎから加工・染織までを行うプロジェクト(写真1)、2つ目は、檜原村名物の「ヒノジャガ」を育て、ジャガイモあんのおやきを製造し、地産地消の新しい商品の開発をめざすプロジェクト、3つ目は、まきや炭、堆肥利用目的の里山から、果樹の植林へ変更し、果実の食品加工から6次産業化を考えるプロジェクトです。

毎回10～20人、2017年から現在まで、延べ450人を超える中高生・短大生が参加し、里山の樹木調査、間伐作業、植林、まき割り、道作り、畑作り、商品開発に励んでいます。1つ目のプロジェクトについては、2019年度から小学生と保護者への案内も開始し、4月から9月までで延べ42人(保護者23人、小学生19人)が参加しました。今後は地元の小中学校との交流会への発展や、地域の児童・小学生とその保護者の2世代との交流も協議中です。

写真1 2019年9月のようす



耕作放棄地をオーガニックコットン畑にリノベーションした。

## 三重県尾鷲市須賀利プロジェクト

日本では少子高齢化に伴い、2003年に約23.8万人いた漁業就業者は、毎年一貫して減少傾向にあります。しかも高齢化と後継者不足は深刻で、2017年の40歳未満の漁業就業者は約2.8万人<sup>\*2</sup>となっています。また、自然資本を活用する文化の衰退も日本の抱える大きな課題となっています。そこで本校では夏休みを活用し、株式会社ゲイト<sup>\*3</sup>、三重大学、そして三重県庁との協働により三重県スタディツアーを企画しました。日本の原風景が残る漁村、三重県尾鷲市の須賀利で定置網漁を経験し、捕った魚を食べて、須賀利の魅力を肌で感じてもらう内容です。食事は参加者が定置網漁で自分たちで捕った魚を、地元の人などに調理方法を教わり、調理して食べます(写真2)。東京では見たこともない魚ばかりですが、地元の調理方法と鮮度の良さから、今までに食したことのないおいしさを体験できるのです。

須賀利には子どもや若者がほとんどいない<sup>\*4</sup>ことを知り、参加生徒の1人が「この町がなくなるのは寂しい」と語ってくれるなど、学生たちには、日本の抱える課題の解決に向けて何ができるかを考える気持ちが芽生えていました。帰りの車中では早速、定置網漁で取れる魚の種類や調理方法を動画に収め、SNSを活用したビジネスモデルを考え始めていました。その後、取れる魚のおすすめメニューを考案し、広めたいというアクションも生まれています。学びをリアルな社会と接続させると、学生たちは自然と社会課題を「自分ごと」化し、利他的な思いを持ちながら、主体的に深く学び始めていくのです。

写真2 定置網漁のようす



\*2 [http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29\\_h/trend/1/t1\\_2\\_2\\_3.html](http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29_h/trend/1/t1_2_2_3.html)

\*3 持続可能な社会実現のため、生産地と消費地の懸け橋となることをめざしている。須賀利で生態系に配慮した定置網漁を始め、取れた魚を自社で加工し自社便で都心部に届ける事業を展開している。

\*4 現在、高齢化率が80%を超え、2018年度の調査によると人口が222人という過疎化問題を抱え、小中学校も休校となっている。